おおかみのまつ毛　　岩手県

むかし、あったとさ

むかし、ある村に、右衛門太郎（うえもんたろう）と左衛門太郎（さえもんたろう）が、となりどうしに住んでいました。

あるとき、ふたりそろって、山仕事に出かけました。夜になったので、ふたりは山小屋に泊まりました。どちらも、もうすぐおかみさんに赤ん坊が生まれるので、こんな話をしました。

「左衛門太郎よ。もし、わしの所に女の子が生まれて、おまえの所に男の子が生まれたら、ふたりを結婚させないか。娘をおまえの息子の女房にしよう。そして、わしの所が男の子で、おまえの所が女の子だったら、おまえの娘をうちの息子の女房にしてくれ」

「そうだな。そうしよう」

ふたりは、そう約束して寝ました。

夜遅く、その山小屋の前に、おおぜいの神さまが集まりました。山の神さまは、少し遅れてやって来ました。神さまたちが、

「どうして遅れたんだ」ときくと、山の神さまは、

「今、右衛門太郎のかみさんと、左衛門太郎のかみさんが、赤ん坊を産んだのだ。その手伝いをしていて遅くなった」といいました。

「そうかい。それで、生まれたのは、男か？　女か？」

「右衛門太郎の所は女で、左衛門太郎の所は男だ。女のほうは、運をたくさん持って生まれたが、男のほうは、たった鉈（なた）一丁のほか持っていない」

そのとき、右衛門太郎と左衛門太郎は、はっと目を覚ましました。右衛門太郎が、

「おれ、今、神さまが集まっている夢を見たぞ」といって、夢の話をすると、左衛門太郎も、

「おれも同じ夢を見た」といいました。ふたりは大急ぎで、夜道を走って家に帰りました。

家に着くと、どちらの家にも赤ん坊が生まれていました。右衛門太郎の所は女の子、左衛門太郎の所は男の子でした。そこで、約束どおり、子どもたちが大きくなると結婚させました。右衛門太郎の娘は、左衛門太郎の息子の女房になって行きました。

息子の女房がたくさんの運を持ってきたので、左衛門太郎の家は大いに栄えました。田地田畑を買い入れて、取引も多くなり、みながいそがしく働くようになりました。左

衛門太郎の息子は、いそがしいのが嫌になって、何とかして朝寝をしてみたいと思いました。

ある日のこと、息子が占(うらな)いをしてみると、こんなお告げがありました。

「よもぎの矢にうつぎの弓を用意して、朝早く、屋根に向かって射れば、ゆっくり朝寝(あさね)ができる」

息子は喜んで、よもぎの矢とうつぎの弓をこしらえて、朝早く外に出て、屋根を見上げました。すると、屋根の上に、烏帽子(えぼし)をかぶった白いひげのおじいさんがいて、扇子(せんす)で四方を招いていました。息子は、そちらに向かって矢をバチリと射て、またふとんに入って寝ました。

その日、息子の女房が、用があって蔵に行くと、蔵の中で、うんうんうなる声がしました。何だろうと思って、奥まで行って探すと、烏帽子をかぶった白いひげのおじいさんが、左の目をよもぎの矢で射られて苦しんでいました。女房は、すぐにその矢を抜いてやりました。おじいさんは、

「わしは、おまえに付いている福の神だ。けれども、おまえの夫に矢で射られたから、この家から出て行く」といいました。そして、しおしおと出て行ってしまいました。

それからというもの、今まで出入りしていた人たちはだれも来なくなり、米びつに米は無くなり、財布(さいふ)にはお金も無くなって、日ましに貧乏になっていきました。

女房は、

「もうここにはいられない。いっそのこと、おおかみにでも食べられて死んでしまおう」と思って、家を出ました。

女房が歩いて行くと、三匹のおおかみに出くわしました。女房は、

「おおかみどの、おおかみどの。わたしを食べておくれ」とたのみました。おおかみたちは、

「おれたちがとって食うのは、きつねの頭(かしら)だの、犬の頭だの、魚の頭だのしたやつだけだ。あんたはほんとうの人間だから食わない」といいました。女房がそれはどういうことかと尋ねると、おおかみたちは、いいました。

「おれたちのまつ毛を三本やるから、町へ行って、このまつ毛をかざして見てごらん。道行く人たちは、みなきつねだの、犬だの、魚だのの頭をしている。その中に、たったひとり、ほんとうの人間が通るから、その人について行くといい」

女房は、まつ毛をもらって、町へ行きました。道に立って、まつ毛をかざして見てい

ると、たくさんの人が、がやがや話しながら歩いていましたが、人間の頭をした人はひとりもいませんでした。

夕方になって、蓑(みの)を着て炭俵(すみだわら)を背負ったみすぼらしい男の人が、急ぎ足で通りかかりました。おおかみのまつ毛をかざしてよく見ると、その男の頭はちゃんと人間でした。女房は、男の後について行きました。

やがて男は気がついて、

「何しに、わしの後について来るんだ」とききました。

「どうかわたしをあなたの家に連れていってください」と、女房がいうと、男は、

「わしは、むこうの山の炭焼きだ。どこの奥さまか知らんが、あんたのようなりっぱな人を、うちには連れていけない」といいました。それでも、女房は、むりやり炭焼きの男の後について行きました。

炭焼き小屋に着くと、女房は、

「足を洗いたいけれど、洗い場はどこですか」とききました。

「そこの沢に洗い場があるから、そこで洗え」

女房が行ってみると、洗い場の踏み石は金(きん)でできていて、口をゆすいでみると、沢の水はお酒でした。女房は、あわててもどって、炭焼きに、

「おまえさん。洗い場の踏み石は、あれは何ですか」とききました。

「あれか。あれは、ただの山石だ」

「いえいえ、あれは、ただの石じゃありません。金ですよ。そして、沢の水、あれは何ですか」

「あれは、ただの沢の水だ」

「いえいえ、あれは、ただの水ではなくて、お酒ですよ」

それから、女房は、いろりの踏み石を見て、

「これは、何ですか」とききました。炭焼きは、

「山から拾ってきた山石だ」といいました。女房は、

「いえいえ、これも金ですよ。あした、町へ持って行って売ってごらんなさい」といいました。

次の日、炭焼きは、山石をふたつ三つ持って町に行きました。すると、たいそう高く売れました。沢の水はお酒だったので、酒屋を始めて売りだしたら、えらく繁盛(はんじょう)しました。女房と炭焼きは、いっしょに暮らして、たいそうな長者になりました。

ところで、左衛門太郎の息子は、年をとってますます貧乏になりました。鉈を一丁持って山へ行っては木の皮をはいで、それを売って暮らしました。

ある日のこと、左衛門太郎の息子は木の皮を売った帰りに、酒屋によって、酒を飲みました。女房は、元の夫だと気がついて、握り飯にこっそりお金を入れて渡してやりました。左衛門太郎の息子は、帰るとちゅうで犬にほえつかれたので、

「これは、酒屋の女房からもらった握り飯だけど、そんなにほえるならくれてやろう」

といって、握り飯を犬に投げてやりました。

次に息子が来たとき、女房は、竹の杖にお金を入れてやって、

「あんたも年をとって大変だろうから、この杖を使うといい」といって、渡しました。

帰るとちゅう、遊んでいた子どもらが、

「あのじいさん、酒屋のおかみさんから杖もらったぞ」と、はやしたてました。息子は、

「そんなに欲しいなら、くれてやる」といって、杖を子どもらにやってしまいました。

その次に息子が来たとき、女房は、

「この前あんたにやった握り飯はどうしましたか」とききました。息子は、

「犬があんまりほえるから、投げてやった」といいました。

「じゃあ、竹の杖はどうしました」

「子どもらが欲しがるから、くれてやった」

女房は、

「あの握り飯にも竹の杖にも、中にお金を入れていたんですよ。あんたは、よくよく運のない人だねえ。このわたしを、だれだと思う」とききました。

「この酒屋の女房じゃないのかい」

「わたしは、右衛門太郎の娘、あんたの元の女房ですよ」

女房は、左衛門太郎の息子を酒屋のかまどの火焚きにして、一生面倒を見てやったということです。

どっとはらい

村上郁　再話

資料　『紫波郡昔話』佐々木喜善／郷土研究社